

大学

私たちは挑戦していかなければならない

上山市

村松 真 東北創生研究所

取材日 2012.10.05

山形大学准教授・東北創生研究所コーディネーター。専門は地域計画論、農業経済学、資源環境経済学、地域づくり、まちづくりである。震災後、山形大学の学生たちとともに「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」を立ち上げ、だんだんと移り変わるニーズや課題の中、宮城県東松島市と石巻市で復興支援活動を行なった。

3月11日 14時46分

次の日の水力発電の研修会の準備を終えて、西川町から車で移動しており、県職員と学生2名が同乗していた。西川町役場の近くで、突然地震が起きた。車に乗っていても大きい揺れだと分かり、すぐに停車するよう指示をした。1978年、仙台で学生生活を送っていて、宮城県沖地震を経験した。かなり大きい揺れだったので、その地震を思い出した。すぐにまた宮城県沖地震が来たのだと直感した。電柱も看板もぐらぐら揺れていて、落ちてきそうで危ない。揺れている時間がかなり長かったので、被害は大きいだろうと感じた。車には宮城県出身の学生が乗っていたので、「宮城県沖地震だからご家族に連絡しなさい」と指示した。その時は電話がつながっていたようだが、すぐに停電で電話はつながらなくなった。車のガソリンがなくなってしまったので、その地点から一番近い県職員のお宅にお邪魔した。

その後、車を乗り換えて大学の研究室まで県職員に送ってもらった。信号機が消えて、道路は渋滞していた。県の職員も総合支庁に戻っていった。研究室はほとんど被害がなく、無事だった。家族や家を確認するようと言って学生を帰宅させ、私は車で宿舎に戻り、姉の安否を確認した。山形は大きな被害がなかったと思う。

夕方、テレビで津波の被害を知った。映像を初めて見た時は実感がなく、信じられなかった。映画を見ているよう、もしくはスマトラ沖地震のように遠い国の出来事だと思った。まさか日本で起きていることだとは信じられない。すぐには受け入れることができなかった。その日の夜は姉の家で過ごした。停電していたので懐中電灯と手動でつくストーブを使った。ガスは回復して使えた。2日目には電気も通り、普段通りの生活ができるようになった。



「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」結成

石巻市出身の学生がいたので、連絡がつくまで何日間か研究室で待機させた。交通はマヒしているので行くことはできないし、学生は心配だっただろうが慌てて動いても何もできない。研究室の電話で石巻市の家族に電話をかけた。4～5日たってようやく連絡がつき、地震から1週間後、学生は地元へ帰省した。その学生は家族や自宅が心配で落ち着いていられなかっただろう。そうした学生の様子を見て、他の学生たちが何かしなければならぬと思うようになっていた。

10日間ほど研究室で5～6人の学生と一緒に過ごした。幸い研究室にはカップラーメンやお米、炊飯器、カセットコンロなどがある。一人暮らしの学生には夜はなるべくグループになって友達と過ごすよう指示を出した。

3月末、大学の人文学部の副学部長から震災復興支援をしなければならぬと相談があった。そこで関係ある先生方4～5人と代表の学生2～3人が今後どうするかについて話し合った。その日のうちに「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」を結成した。次の日、山形市の総合スポーツセンターには被災地の避難者が大勢いたので情報収集に行った。ある程度、道路が確保さ

れ、情報が入ってきてからでなければ動き出せない。泊まることも想定していたが泊まる場所がないことは分かっていたので、車に寝泊まりしようと考えていた。被災地では何も無い。学生たちの安全確保は最優先だ。ボランティアに行く時は、本気で行かなければならない。行ってから「何をすればいいの？」というボランティアは地元の方を困らせるだけだ。「ボランティアのボランティアはいないぞ」と学生に言い聞かせた。被災地ではマンパワーが必要だと考えたので、自分たちが移動できる手段と食料を用意した。また、瓦礫撤去などの作業が想定されたので、雨具、長靴、軍手、帽子などを準備した。

初めて被災地を訪れて

山形大学人文学部は蔵王の青年部と連携協定を結んでいる。4月3日、蔵王の青年部と一緒に初めて被災地を訪れた。総勢21名。場所は石巻市の渡波地区だ。皆ショックを受け、言葉が出ない。どう表現して良いのか分からなかった。車が1台通れるほどの道が確保され、その両サイドには瓦礫が積み上げられている状態だった。渡波駅にも人が泊まっていて、近くにトイレがあったがとても使用できる状態ではなかった。状況の把握とできることを手伝おうと思った。情報を得るために時間を見つけて写真を撮影した。地震からはかなり経過していたので食料に困っているだろうと思い、炊き出しを行なった。また、瓦礫撤去の支援では私たちは人力なので床上浸水したくらいの家しか支援に入れまいだろうと判断した。片づけを始めている住民がいたので、何グループかに分かれて「何か手伝うことがある方は申し出てください！」と呼びかけながら道路を歩いた。ピアノやタンスを運び出したり、畳をはいたりする仕事が尽きることがないほどあった。被災地に入ったら「今回の震災を受けてどうだったか」と被災者に質問しないことを徹底した。学生も企業も被災者の方々と交流したかったようだが、被災された方は肉親を亡くしているなどさまざまな事情を抱えている。一緒に作業をする中でおのずと話してくれるようになる。後で学生たちに聞いてみると、苦しいことも大変だったこともすべて話してくれたという。一緒に作業をするだけで、質問なんかする必要はないのだ。アンケートや調査などの研究は後からでもできる。黙って震災復興を手伝うことが先決だと思った。

ニーズの移り変わりと課題

最初は炊き出しや瓦礫撤去だったニーズはだんだんと移り変わってきている。作業の記録を見ると

情報収集から被災地・避難所訪問、炊き出し、被災地家屋の復旧作業、物資提供支援、仮設住宅への物資配布、自転車・バイクの収集と提供、お茶のみクラブ、悪臭対策、放射線調査、除菌水精製装置取り付け、公園での音楽クラブ、ミーティング、復興状況報告会などさまざまな形で移り変わっている。企業を巻き込むことで多岐に渡る活動を行なうことができた。お茶のみクラブには山形のお菓子を持って行ったが、当然資金が必要なので、連携している企業が出資してくれた。活動を見て復興支援に役立ててほしいと寄付をしてくださるところもあった。山形大学、学生と民間企業が協働して行なった「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」の活動で、被災地へ総額1,800万円の寄付をした。

1家庭でもいいから、個々のレベルで支援をしなければならぬと思っている。ある程度、個人の生活に見通しが立たなければ、地域づくりを進めることはできない。

学生と企業の協働のモデル

この支援活動を通して学者の事情や公務員の事情、民間が手助けしたいのにできない状況などさまざまな構図が見えてきた。学者は組織的、体系的に活動をすべきなどと言うが、最初からそうした体制は作れない。マンパワーが充分になった上で、次第にできてくるものだからだ。最初から組織的にはできないし、皆がそれぞれゆかりのあるところへ支援に入るしかない。誰も経験したことがないので、最初は支援のばらつきができるは仕方のないことだ。ある程度片づいて落ち着いたところで見えてくるものがある。

これまで述べ426人の学生がこのプロジェクトに参加している。大学なので教育の一環でもあるのだが、学生たちは多くのことを学んだと思う。個人で民間企業が被災地に入ると地元の人に怪しいと思われてしまうことがあるが、このプロジェクトの支援企業になることで民間企業の社会貢献も私たちのボランティアも力を合わせて一緒にやることができる。現地情報を分かっている地元の学生や卒業生もメンバーになった。学生は労力があるが資金がない、民間企業は労力も資金もあるが地元とのつながりが無い。これをマッチングさせた。「山形大学人文学部震災復興支援学生プロジェクト」は、学生と民間企業の協働モデルになると思っている。

震災を振り返って

一極集中の社会の弊害は今回の震災で良く分かった。物資は仙台にすべて集まってから山形に来て

いて、仙台がストップしてしまうと経由している県の流通がすべて止まってしまう。一極集中は良い側面もあるが、その周辺を衰えさせる。この機会に自立分散型の社会を作らなければならないと思う。自立分散型であるためには地域社会システム、地域経済システムや地域エネルギーがセットでなければならない。極端な自立分散型は自給自足の社会だ。それは現代ではできないので、ある程度自立分散型ができていて、比較優位の原理で地域間が輸出輸入しながら経済全体が発展するような現代型の仕組みができればいいと思う。エネルギーは薪、石炭、石油、原子力と変遷してきた。まずはエネルギー革命を起こさなければならない。

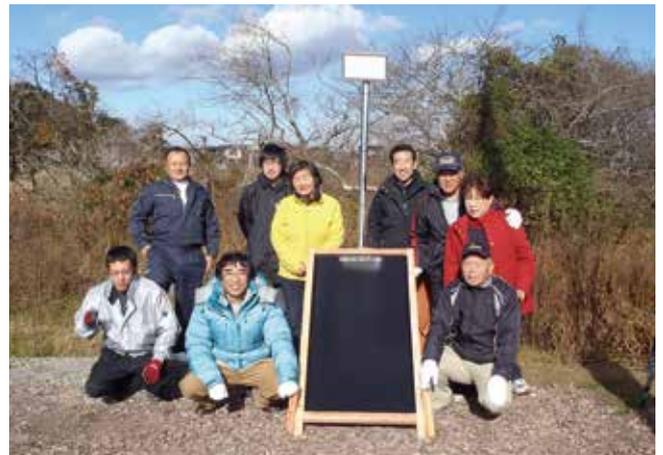
多雪地帯では水が安定的に供給できるので、現在、小規模の水力発電を進めている。水の状況を注意して見ることにより、周りの環境が分かる。水は第一次産業には欠かせないし、水の動きを注意して見ながら、エネルギーを取ることができれば効

率的だろう。私たちは挑戦していかなければならないと思う。

今回の震災は、自然を無視してはならないと伝えているのだと思う。現代人は忙しすぎる。人間は何に生かされているのか。いくら高層ビルが立ち並んでも、周りにいろいろな自然があることで食べ物や水、気候が保たれている。そうして生きていることを私たちは忘れてはいけない。自然を意識して人間の営みをすべきなのだとメッセージが込められている気がする。私たち学者がどんなに分厚い資料をまとめて残したとしても、後世には伝わらないだろう。どんどん風化して忘れ去られてしまうかもしれないが、津波がここまで来たという痕跡を残すことはできる。現地に災害の痕跡を表す石碑を立てたり、モチーフを設定したり簡単に伝承する方法が必要だと思う。古いものに新しい何かを加えて、現代の伝承として後世に伝える術を模索しなければならない。



撮影：2011.7.24 南相馬市原町二中避難所
第2回ありがとう祭りin火の祭り「願と絆」(つなごろう南相馬! 提供)



宮城県山元町 仮設住宅団地の駐車場 (ソーラーワールド株式会社提供)



撮影：2012.3.12 山形避難者支援団体意見交換会
(NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル提供)



支援者の集い (NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル提供)